

巻頭言 地域連携事業の今日的意義

九州共立大学 山田 明

こんにちは。岡垣町の皆様。昨年に引き続き本学の学生が作成した地域活性化新聞『岡垣歴史新聞』（第2号）をお贈り致します。今回は、岡垣町の自然や歴史の象徴の一つである「湯川山」を特集しております。郷土に関する「歴史探訪の旅」をお楽しみ下さい。さて、教育界の話題として地域連携に関連する内容を含んだ（次期）学習指導要領の改訂案が告示されました。その重要な理念の一つが「社会に開かれた教育課程」であり、そこには次のようなポイントが指摘されています。①社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい社会を創っていくという教育目標を（社会と）共有すること、②これからの社会を創っていく世

代が人生を切り開いていくために必要な資質・能力を身に付けさせること、③地域の人物や物的資源を活用し、学校教育を学校内に閉じず社会と連携すること等です。地域と教育（機関）の連携、いわゆる地域連携に必要な視点は、大学においては上記に加え、「知（地）の拠点」として高い付加価値を生み出す機能を強化すること、学生においては社会を生き抜く資質・能力、いわゆる市民性を涵養すること、地域においては学生の社会貢献活動を活用し地域活性化を推進することが期待されています。これら現代教育の課題への処方箋として、昨年に引き続き実施した本学と岡垣町における地域活性化新聞による

『岡垣歴史新聞』の第2号が発表されています。今号は、いまだ解明されていない「湯川山の石垣跡の謎」についての特集ということで、学生の皆さんの取材力や視点を生かし、様々な説について検討を行ったものになっています。このように、学生の皆さんが岡垣町の歴史について考えたり調べたりすることは、町民の郷土愛が深まることにつながると思っています。この岡垣歴史新聞を通じて、町民の皆さんに「この町に住んでよかった。住み続けたい」と思ってもらえることを期待し、岡垣歴史新聞第2号発刊のお祝いの言葉といたします。

岡垣歴史新聞の第2号発表を祝う

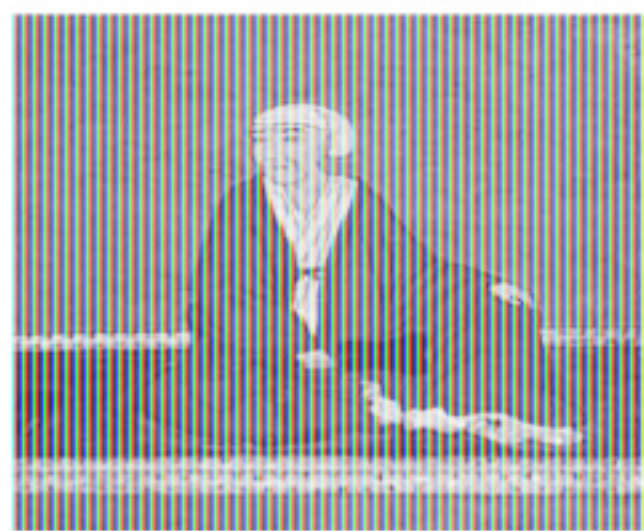
岡垣町長 宮内 實生

岡垣町と九州共立大学は、平成二十七年八月に包括的地域連携協定を締結し、様々な分野で連携を進めています。その一つとして、昨年の広報おかがき十二月二十五日号では、九州共立大学の学生五名に「おかがきの魅力再発見」をテーマとした特集記事の取材を行っていただきました。町内で暮らし、暮らす人、働く人が町を大切にしている。これこそが魅力の源である。とまとめられた記事を読み、私も岡垣町の魅力をあらためて実感することができました。さて、地域連携事業の一環で行われ

ている『岡垣歴史新聞』の第2号が発表されました。今号は、いまだ解明されていない「湯川山の石垣跡の謎」についての特集ということで、学生の皆さんの取材力や視点を生かし、様々な説について検討を行ったものになっています。このように、学生の皆さんが岡垣町の歴史について考えたり調べたりすることは、町民の郷土愛が深まることにつながると思っています。この岡垣歴史新聞を通じて、町民の皆さんに「この町に住んでよかった。住み続けたい」と思ってもらえることを期待し、岡垣歴史新聞第2号発刊のお祝いの言葉といたします。

龍昌禅寺コラム

黒田如水の肖像画



『岡垣町史』 (1988) 岡垣町史編集委員会編より

平成二十六年度NHK大河ドラマ「軍師 官兵衛」で主人公として登場した黒田如水の肖像画（県指定文化財）が龍昌禅寺の寺宝として伝わっている。如水といえ、播磨（兵庫）の小豪族の家に生まれるも、織田信長の中国地



龍昌禅寺の山門（入口） (編集委員会 撮影H29.8)

龍昌禅寺の山門（入口） 龍昌禅寺の山門（入口）は、黒田如水の肖像画が寺宝として伝わっている。如水といえ、播磨（兵庫）の小豪族の家に生まれるも、織田信長の中国地

龍昌禅寺を再興し、自らの菩提寺とした人物、それが井上周防である。周防は、如水と同じ播磨（兵庫）の出身で、如水の父職隆を皮切りに如水・長政・忠之の黒田家三代の当主に仕えた重臣中の重臣である。如水が筑前を支配すると、黒崎城の城主に任命され、領内防衛の一翼を担った。吉木の地にも別邸を建て、そうした縁から龍昌禅寺開基の一件につながる。当然のことながら、周防の墓所は龍昌禅寺境内にあり、合わせてその肖像画が伝わっている。周防の肖像画は、八幡西区穴生の弘善寺にも伝わるが、こちら弘善寺は周防の妻の菩提寺で、周防と妻（玉章院）が二人して描かれた夫婦肖像画となっている。頭巾姿で寛く周防の傍らに妻玉章院が座しているものである。これに対して龍昌禅寺の肖像画は、周防一人の単独肖像で、やはり頭巾姿で寛く絵姿である。ちなみに頭



『岡垣町史』 (1988) 岡垣町史編集委員会編より

井上周防の肖像画

井上周防の肖像画 龍昌禅寺を再興し、自らの菩提寺とした人物、それが井上周防である。周防は、如水と同じ播磨（兵庫）の出身で、如水の父職隆を皮切りに如水・長政・忠之の黒田家三代の当主に仕えた重臣中の重臣である。如水が筑前を支配すると、黒崎城の城主に任命され、領内防衛の一翼を担った。吉木の地にも別邸を建て、そうした縁から龍昌禅寺開基の一件につながる。当然のことながら、周防の墓所は龍昌禅寺境内にあり、合わせてその肖像画が伝わっている。周防の肖像画は、八幡西区穴生の弘善寺にも伝わるが、こちら弘善寺は周防の妻の菩提寺で、周防と妻（玉章院）が二人して描かれた夫婦肖像画となっている。頭巾姿で寛く周防の傍らに妻玉章院が座しているものである。これに対して龍昌禅寺の肖像画は、周防一人の単独肖像で、やはり頭巾姿で寛く絵姿である。ちなみに頭

龍昌禅寺を再興し、自らの菩提寺とした人物、それが井上周防である。周防は、如水と同じ播磨（兵庫）の出身で、如水の父職隆を皮切りに如水・長政・忠之の黒田家三代の当主に仕えた重臣中の重臣である。如水が筑前を支配すると、黒崎城の城主に任命され、領内防衛の一翼を担った。吉木の地にも別邸を建て、そうした縁から龍昌禅寺開基の一件につながる。当然のことながら、周防の墓所は龍昌禅寺境内にあり、合わせてその肖像画が伝わっている。周防の肖像画は、八幡西区穴生の弘善寺にも伝わるが、こちら弘善寺は周防の妻の菩提寺で、周防と妻（玉章院）が二人して描かれた夫婦肖像画となっている。頭巾姿で寛く周防の傍らに妻玉章院が座しているものである。これに対して龍昌禅寺の肖像画は、周防一人の単独肖像で、やはり頭巾姿で寛く絵姿である。ちなみに頭

中姿というのは、晩年の様子で、柏（道柏）と号していた時であろう。周防は元来、井上九郎右衛門之房と名のついていたが、黒崎城代となつてからは、井上周防を名のり、晩年は道柏と号した。ところで、周防の肖像画の方も県指定文化財であるが、この如水・周防二人の肖像画の最大の特徴は、おおよそ戦国武将らしからぬイメージを受ける点である。頭巾姿の二人から受けるイメージは、武將（武士）というよりは、商人の御隠居さん、風流人のイメージを強く受ける。一味違った戦国武将の肖像画として価値あるものといえるだろう。 (文・編集委員会)

*参考文献 「北九州の史跡探訪」北九州市史跡同好会 「郷土報（第2号）」八幡郷土史会 二〇一四年NHK大河ドラマ特別展 軍師官兵衛（図録） 黒田如水 三浦明彦 西日本新聞社

迫ってみませんか？

湯川山は、宗像市玄海町と境を接する標高四七一メートルである。別名、木綿間山ともいう。内浦登山口より垂見峠分岐までは踏み跡がしっかりした歩きこまりやすいルートである。復路は成田山不動寺に下る最短ルートの登山道があるが、急な遊歩道であり注意しながら歩いたほうがよい。山頂からの眺めは、眼下に緑の三里松原と白波打ち寄せる響灘を見ることができ素晴らしい眺めである。春には桜の名所でもあり、湯川山中腹を通る林道も舗装整備されていて絶好のドライブコースにもなっている。「岡垣町誌」によると、湯川山には古代より牧(場)が設けられていたといわれ、藩政期には牧場は東西二三町ともいわれるほど広大であったという。また、牧場は牧場の外圍いといわれる石垣や空堀が現存しているという。この湯川山で、古代の大規模な山城の遺跡ではないかともいわれた遺跡(石垣)の発見「一九八〇年代初頭」があった。

『岡垣歴史新聞』(第2号)では、この湯川山を特集する。古代の山城跡かともいわれたこの石垣の発見について、福岡県教育委員会に問い合わせたところ、湯川山のこの石垣の謎はまだ解明されていないということであった。そこで学生記者がフィールドワークをして自説を展開する。郷土の歴史遺産である湯川山について、岡垣のみならず一緒に石垣の謎に迫ってみませんか？

※④防衛施設については、編集委員会の仮設です。太平洋戦争中に内浦に高射砲陣地があったという話はあるそうです。

(寺島 暉)



私の説は、ずばり「牧場説」である。今回、湯川山の石垣についてフィールドワークや取材をおこなった結果、湯川山の石垣は牧場の跡でないかと考えた。岡垣町に伝承されている「摺墨伝説」がある。摺墨というのは墨のように黒い毛の馬で、梶原景季の愛馬であり名馬として知られている馬である。この摺墨が生まれ育った牧場が湯川山にあったという話だ。石垣は牧場のための土壌を固め、基礎を作り、足場にしたり、土砂崩れなどを防いだりするために必要だったのではないかと。摺墨伝説に關係した景石神社が湯川にある。湯川山に牧場があったということは昔から伝えられている。例えば、

小石記(藤原実資の日記)に糟屋・宗像・遠賀に九州最大規模の「高田の牧」があり、湯川山も含まれるという説もある。問題は、古代の牧場なのか、摺墨伝説にちなむ中世のものか、近代の黒田藩治世下の牧場なのか問われてくる。私は約三十五年前に発見された石垣が中世の摺墨伝説にちなむ遺構であると考へたい。そしてその牧場は岡垣で名馬を産出するために重要なところであったと考へられる。大切な牧場を守るために住民たちが巨大な石垣群をつくったのではないかと思ふのである。(中西寿明)

*参考文献
『岡垣町史』(一九八八)／岡垣町史編纂委員会 編 八六六頁 九六五〜九六六頁

② 砂防施設説 (フィールドワーク雑感)

『岡垣歴史新聞』第2号の特集記事の執筆にあたり、岡垣町の湯川山をフィールドワークし取材をしました。約三十五年前に発見された石垣については、まだ定説がないとのことでしたので、私が湯川山を直接見て考えたこと、疑問に感じたことを述べたいと思います。結論は、昔ダムがあったのではないかと、この石垣は砂防ダムの一部ではないかという意見です。湯川山で発見された石垣の空堀は十二キロもあり、これは山城ではないかという説も根強い意見だと思います。他にも遺跡の一部は牧場の構造で堀は水路やサクの代わりという牧場説、地元住民らが造った山林の防火壁ではないかなどの説もあるそうです。湯川山は岡垣を象徴する山であり、自然の豊かさを誇っている郷土の遺産です。岡垣は水の品質も

大変良好なものとして知られています。私は郷土の名水を大切にできたということ、古くから農業が盛んな岡垣の水資源を確保するためのダムの必要性の視点から、あるいは山による水害に対する砂防的な意味でこの石垣が作られたのではないかと考へました。また石垣がつけられた時期は、山から水を引いて農作業に使用したと考へた場合、その高度な土木技術の必要性から近代になってからのものであるとも考へました。今回のフィールドワークの途中で、湯川山の周りを車で回りながら見ていると、大きな石が山の裾野や道路わきにあることが確認できました。これらも、砂防施設としての石垣の遺構の一部ではないでしょうか。(久間健太郎)

話は少し遡るが、ここ岡垣町において一九八三年四月、「地域相研究会」主催の湯川山城見学会及び講演会が開催された。古代山城の可能性があると新聞で報じられた遺跡の発見者で郷土史研究家の竹中岩夫さんが、筑前国統風土記(貝原益軒著)の中にある「初浦の上に大なる牧址あり。めぐりにほりありて、湯川山に至る」の一節に興味を抱き長年にわたって調査してきた山城発見に関する催し物であった。竹中さんは、最初の発見から十年後に「この遺跡は天平十二年朝廷に反乱した藤原広嗣が築いた古代山城」と発表したことを受けてのシンポジウムであった。しかしながら、年代測定の決め手となる生活遺跡が何も発見されていないため、この山城築造には疑問百出することとなる。土塁などの形状が日本最古の朝鮮式山城とされている国の特別史跡・大野城跡と酷似しているとする古代山城説が有望であるとされる一方、当時、北九州史跡同好会会長であった加藤芳人さんは古代山城説に次のような疑問を呈した。①外敵を防ぐための空堀であれば等高線に沿って設けるのが自然だが斜面を縦走する形で掘られている部分がある、②古代水門の石垣は自然石の野積みが普通だが人が切り出したとしか思えない形の整った石が使われているうえ技術が幼稚である、③城があったことを裏付ける地名や言い伝えがない、④城造りの段階も含めて生活した跡がないし人が住むには地形も険し過ぎるなどである。

さて、謎解きである。牧址か古代山城跡か。私は、古代山城説を支持したい。加藤芳人さんの持った疑問にこう答えたいのである。①外敵を防ぐために常識を覆し斜面を縦走する形で掘ったのではないかと、②当時から石を整える技術があったのではないかと、③城があったことを裏付ける地名や言い伝えは敵意的を絞らせないようにするためや何らかの理由があり言い伝えることを禁じられていたのではないかと、④生活感が出ていないのは発見に時間がかかっていることが影響しているのではないかと。私は、この湯川山をフィールドワークしてみても、山城が存在したことを実感したのである。歴史はロマンである。疑問百出は当然である。これらの疑問を他の視点から見ても、山城は実在していたのではないかと考へることも可能ではないだろうか。

※岡垣町民の方から、「地域相研究会」のその後の調査で、近隣の藩政期の牧場跡が湯川山の遺構と酷似しているというところで古代山城説がゆらいだのではという指摘をいただきましたが、確認はできませんでした。

(藤井参太)

*参考文献
地域相研究会「古代山城の謎(古代湯川山城を探る)」一九八三年四月二日(土)三日(日)



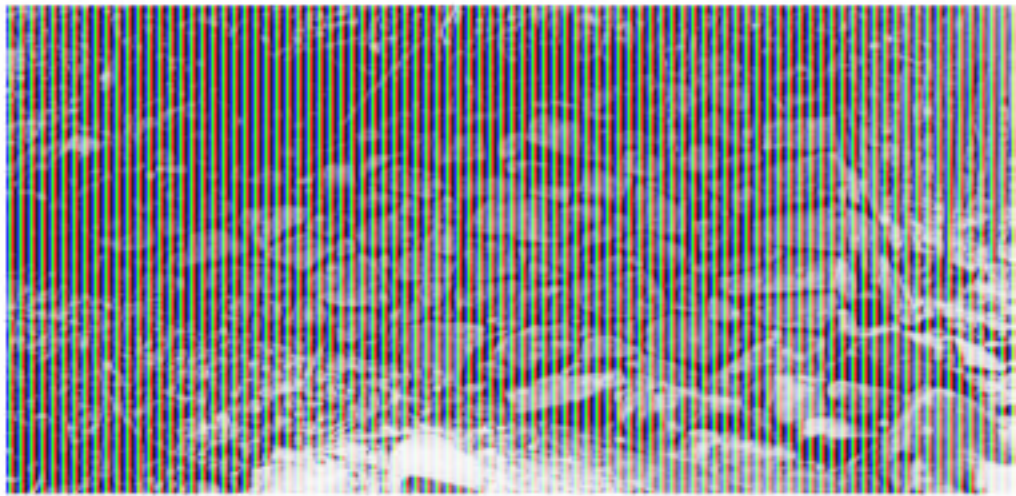
あった。そして竹中氏は、九州大学の西谷正氏と現地踏査を実施した。

その結果、両氏の見解としては、奈良時代の七四〇(天平十二)年に朝廷(天皇政府)に反旗を翻した藤原広嗣が朝廷軍に対抗するために築いた城ではないかというものであった。またそうでないとするならば、「続日本紀」に記載されている幻の城・三野城ではないかということであった。

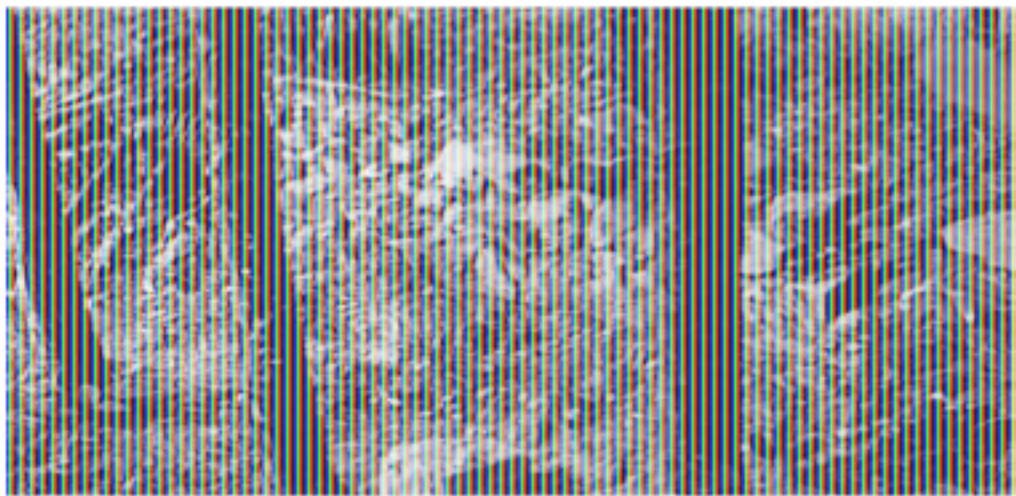
つまり古代の山城という説である。というのも、山頂から北西にかけて規模の大きな土塁と空堀があり、谷間には石垣で築かれた水門が二ヶ所見つかつたことによる。この山城跡らしき遺跡の規模は、太宰府市・宇美町・大野城市にまたがる古代の山城・大野城を凌ぐと考察されている。この説は、新聞紙上でも発表された。

ところが、この古代山城説に疑義が上がり、郷土史家の加藤芳人氏は古代山城説を否定した。この否定の理由は以下の通りである。○空堀の位置が外敵の侵入防止を意図していない。

○石垣の積み方、石の切り出し方が古代の山城と違う。



湯川山に残る謎の石垣 (その一) 「古代山城の謎(古代湯川城を探る) 地域相研究会」6頁



湯川山に残る謎の石垣 (その二) 「古代山城の謎(古代湯川城を探る) 地域相研究会」5頁



湯川山に残る謎の石垣 (その三) 「古代山城の謎(古代湯川城を探る) 地域相研究会」5頁

ようなものであった。○空堀は、昔の牧場遺構の一部ではないか。

○水門は、近代に造られた砂防関係のものか。

○土塁も近代に造られた山林の防火壁ではないか。

ということから氏は山城説を否定し、むしろ牧場遺構説を有力視した。ちなみに牧場説に関していえば、江戸時代に具原益軒が著した「筑前国統風土記」のなかに、湯山(湯川山)に堀をめぐるせた牧場跡があると書かれている。

この一説を以て、加藤氏は牧場を提唱し、竹中氏の古代山城説と並んで、湯川山の謎を解く二大仮説となつた。しかし筆者は、新たな仮説をたててみたい。

それは、近代の軍事施設、軍事要塞ではないかということである。明治から昭和にかけて各地の主要拠点に軍事要塞が構築されたが、玄界灘方面にも軍事施設が置かれた。

その沖ノ島にさえ、砲台が築かれ、守備隊として陸軍から一五〇人、海軍から二十五人、合計一七五人が派兵されていたのである。言わんや大島にも大規模な砲台が築かれ、同じく守備兵が配置されている。

その沖ノ島、大島を前衛として見るならば、後詰めの位置にあるのが、湯川山である。言うまでもなく、湯川山の山頂等からは海を玄界灘を眼下に納めることができ

この位置的なものもさることながら、筆者が軍事要塞と目する点は、今一つある。それは石垣、湯川山で城の石垣とされるものと酷似した石垣のある軍事要塞で目撃したからである。目撃した要塞は、笹尾砲台という。住所でいうと、北九州市門司区青葉台ということになる。地理的には標高一〇〇メートルの高台に築かれた砲台で、前記の青葉台から光町の山中に痕跡を止め、近辺の山道は、小倉北区赤坂の鳥越峠を抜けて手向山砲台に通じている。

その笹尾砲台の石垣が湯川山の石垣に酷似しているのである。そのことは本稿紙面に掲載した湯川山、笹尾砲台、それぞれの石垣の写真を御覧いただきたい。

さて一応というか、念のために笹尾砲台の簡単な紹介をしておきたい。この砲台は、一八八七(明治二十)年に着工、一八八九(明治二十二年)年に完成した。十門の大砲を備え、日露戦争から大東亜(太平洋)戦争終了まで使用されたという。

一八九五(明治二十八年)年、下

関要塞司令部が発足、火ノ山砲台・和布刈砲台・古城砲台・矢筈堡壘・笹尾砲台・手向山砲台・高倉堡壘・富野堡壘等の要塞が構築され、関門海峡防衛のための要塞地帯が形成されるに至る。

つまり、これと同じように玄界灘防衛のための要塞地帯が沖ノ島・大島・湯川山で形成されていたとは考えられないだろうか。

なお最後に一言申し添えると、湯川山の要塞(?)は、古の牧場(馬の放牧場)跡を利用して構築されたのではないかとも思っている。さて、いずれにせよ、湯川山の遺跡、古代の山城なのか、古の牧場なのか、ダム跡なのか、はたまた筆者が仮説を立ててみた近代の軍事要塞なのか、とにかく謎は尽きない。

どうであろうか!もう一度、本格的調査のメスを入れてみては、発掘等も含めて再調査を実施し、シンポジウム、研究討論会を開催してみてもいい。

湯川山のそれが何であるのか、はつきりさせることが、湯川山を今以上に町のシンボリック的存在に見直させ、更なる町の活性化につなげて行けるのではないかと思う。

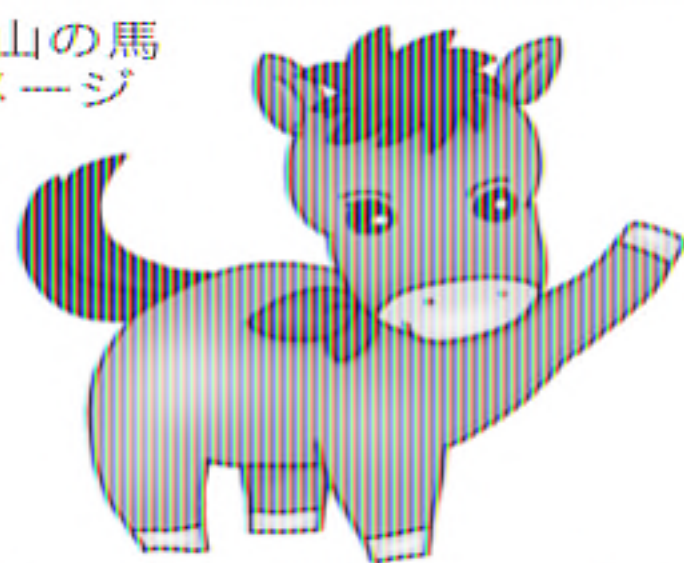
ということで、謎と魅力に満ちた湯川山を再度注目することを提言してペンを置くこととする。

(遠賀町在住・歴史愛好家 三浦明彦)

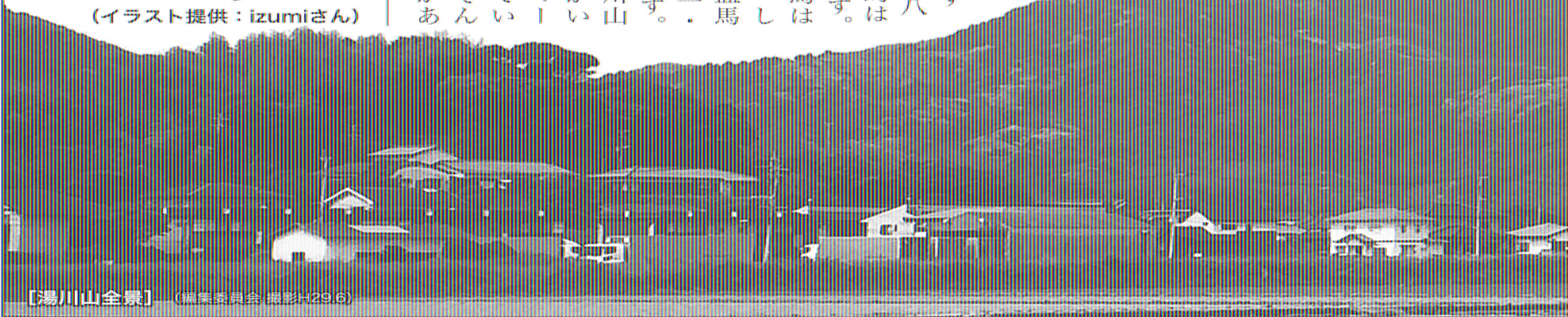
*参考資料
「古代山城の謎(古代湯川城を探る)」地域相研究会
「文化福津」福津市文化協会会誌 第十一号
「神社誌」宗像(第六一七号) 宗像大社社務所・宗像会
「明治遺産」小倉・門司・下関の要塞地帯北九州再発見

れていたそうです。昔から日本は馬を大切にしています。中国も同じです。中国の歴史上で「汗血馬」という名馬がありました。血のような汗を流して走る馬という意味です。紀元前四世紀頃から中国は遊牧騎馬民族の侵入を受け続けました。紀元前二世紀初めの匈奴との戦いで十萬頭の馬を失いました。前漢の武帝時代に、西域への旅行をした張騫の報告により、大宛というところに汗血馬が産することを知りました。その後、外交交渉で汗血馬を手に入れました。汗血馬は一日に千里を走ると言われていました。もちろんこれは誇張ですが、現在も存在するアハルテケという馬は四一五二キロを八十四日間で走るということです。この馬は汗血馬の子孫ではないかと言われています。また、小説三国志演義に登場した赤兔馬は汗血馬をイメージするかもしれません。しかし、中国古代は一・五メートルの汗血馬より小さい蒙古馬もいました。体高は一・二メートルから一・四メートルまでです。日本在来馬も蒙古馬系に属します。湯川山はそういう蒙古馬と似ている小さい馬がいたかもしれない。私は湯川山でのフィールドワークで、牧場の外圍いと言われている石垣や空堀を見ました。この牧場はそんなに大きくありません。そして急斜面があります。そこで、

蒙古馬系の胴長短足で足や蹄が頑丈であり、坂や急斜面に強い馬がこの湯川山で養われたのではないのでしょうか。(張 淑怡)



(イラスト提供: izumiさん)



湯川山全景 (編集委員会撮影H29.6)

九州共立大学地域連携推進セ...

九州共立大学・岡垣町 包括的地域連携に関する協定書 調印式



より豊かで潤いある生活を営むことができる社会を形成していくために、大学等の高等教育機関の担うべき役割は年々その大きさを増していると感じております。九州共立大学では、これまで実施してきた地域との連携体制をさらに充実させるため、平成二十九年四月に「地域連携推進センター」を開設しました。地域連携推進センターは、「地域連携部門」、「生涯学習・資格取得支援部門」、「研究部門」から構成され、学生と教職員が協働して地域と「共に立つ」ことを合言葉に活動を始めております。岡垣町とは、平成二十七年八月に締結した「岡垣町と九州共立大学との包括的地域連携に関する協定」を基に、今年度は八項目の連携事業プランを実施しています。本学では、連携事業プランへの学生の積極的な参加を促し、地域の方々と共に地域振興や魅力あるまちづくりに貢献していきたいと考えております。また、学生には、地域との関わりを深めていく中で、地域の自然やこれまで培われてきた歴史・文化、そして、人々の暮らしや地域の産業などを学び、地域社会の発展に寄与できる人材に育ってほしいと願っております。本学では地域連携推進センターを中心に、多くの方々から身近で親しまれる大学となるよう努力して参ります。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

九州共立大学
地域連携推進センター所長 篠原純司

未来をつかむ
チカラを、
共に。



あなたと共に学び、
共に考える4年間が、
ここにはあります。



学校法人 福原学園



九州共立大学
KYUSHU KYORITSU UNIVERSITY

- 経済学部
- スポーツ学部

〒807-8585
福岡県北九州市八幡西
TEL. 093-693-3305

四 これからの活動予定

- ① 会員による研究発表(年二回)
- ② 町内外の史跡巡り(年二回)
- ③ 年報『木綿間(ゆうま)』発行(第三十六号)
- ④ 町民文化祭で町内歴史の展示
- ⑤ 会員三名による『広報おかがき』への『新岡垣風土記』(月一回)を連載中。

＊「岡垣歴史文化研究会」から岡垣町住民への一言メッセージ！

縄文時代からの遺跡が残る歴史ある「岡垣」のことに興味や関心をもっていたいだきたいと思えます。

岡垣歴史人物伝

須藤駿河守行重

須藤駿河守行重という人物は、岡垣町の郷土史には欠かせない人物である。なぜなら岡垣町民に信仰が厚い高倉神社に銅製の毘沙門天像を寄進(一四九一年)した人物として知られているからである。今回、この人物の宅跡をフィールドワークで訪ねてみた。私の名前は「須藤」である。出身は熊本県だが、同姓ということで親近感を感じて調査してみようと思った。さて、大字手野の小堀という所がその宅跡といわれている。この付近には、垣ノ内や裏門といった小字名が残っている。須藤駿河守は延徳年間前後の富豪であったと言われており、次のような伝説がある。この人物は、一日に千町もの田畑を耕作していた。ある年、田植えの時に、あと少しで植え終えてしまうというときに、日が暮れてしまいそうになった。すると、須藤駿河守は、太陽を招き返して

しまったので、無事にその日の田植えを終えたという。この太陽を招き返したといわれるところを、「招きの鼻」といい、今でも小字名に「招キ」というところがある。ところで、須藤駿河守は、謎の人物とも言われているそうである。彼の存在を証明できる資料が少なく、芦屋釜の棟梁とか、幕府から派遣された宮工といった説まで存在している。しかしながら、岡垣町にとっては、歴史上重要な人物にかわりない。久世原というところには、土地の人が「道満さま」と呼んでいる五輪塔がある。これは、須藤駿河守の墓であると言われている。彼の邸宅跡やお墓を訪ねてみて、富豪ではあったが、働き者で、高倉神社に銅製の毘沙門天像を寄進するなど信仰心が篤い人物ではなかったのかという確信が持てるような気がした。

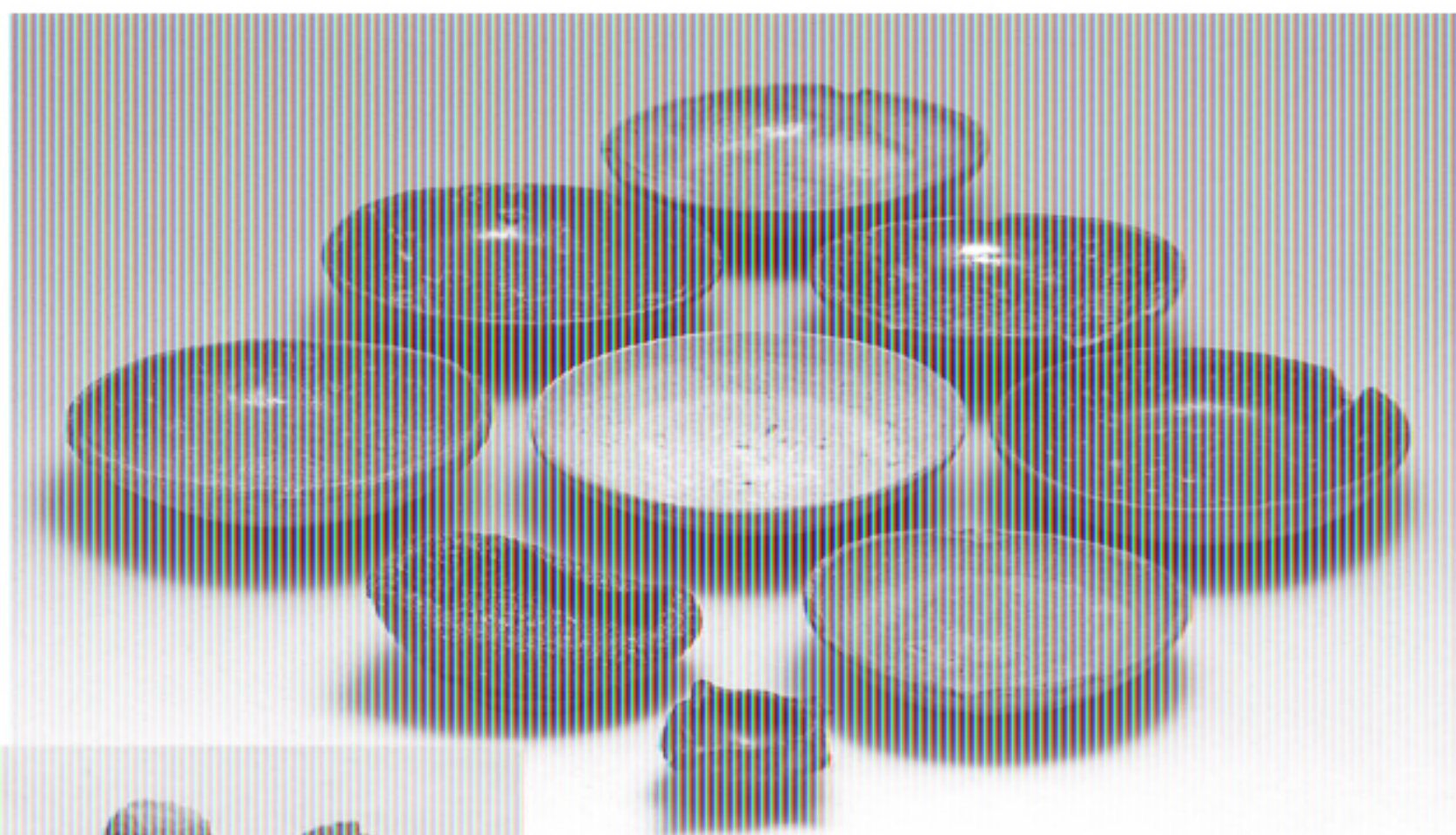
(須藤雄太)

＊参考文献

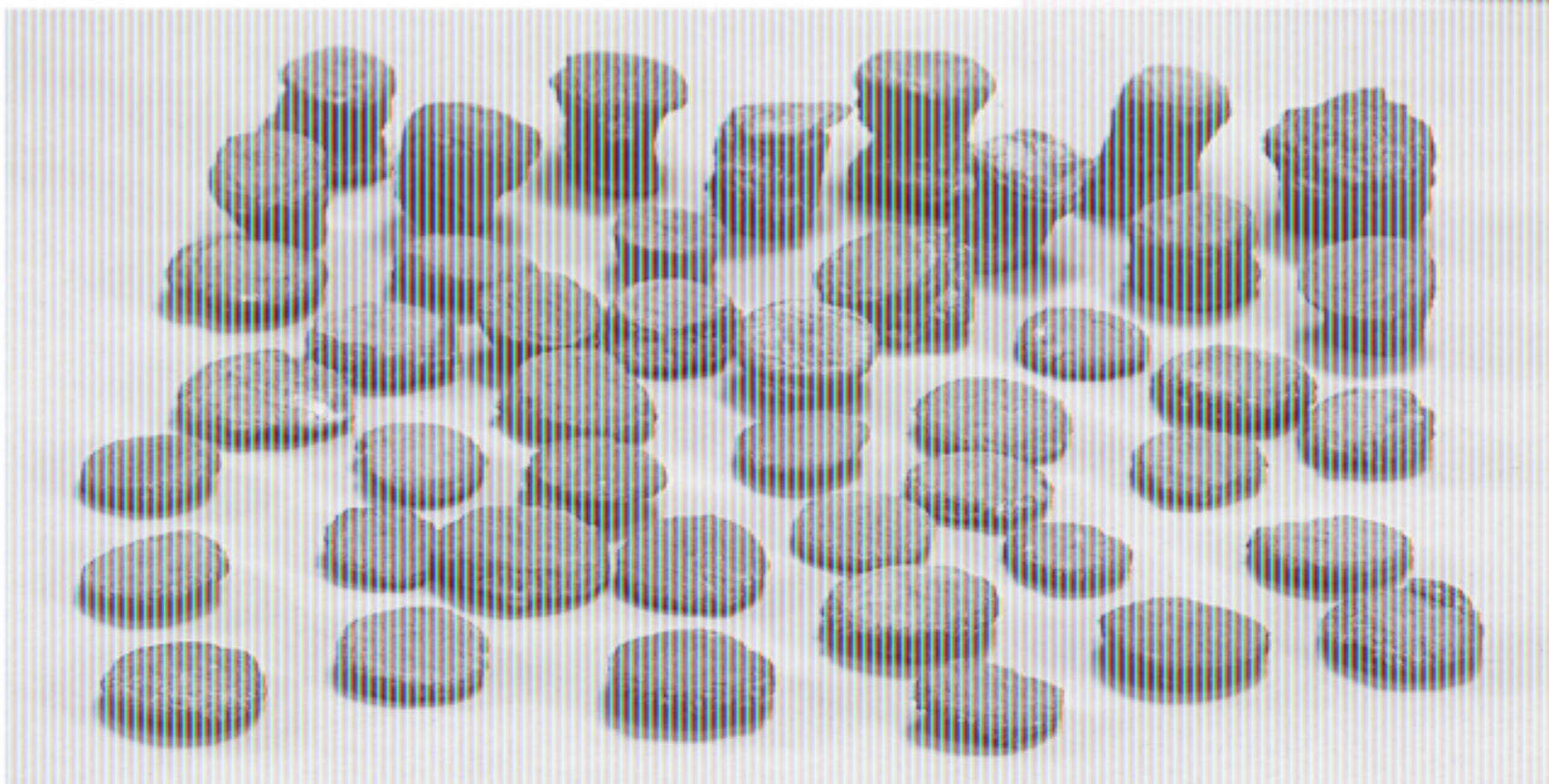
- 『岡垣町史』(一九八八)／岡垣町史編集委員会編 八六六頁
- 『新岡垣風土記』謎の人物須藤駿河守(一九八七)／『広報おかがき』第二五七号

じょう ばた かま
上畑窯と
 岡垣歴史文化研究会

戦国大名たちの間で茶の湯が流行し、茶碗など(茶釜・芦屋釜)が重宝がられると、唐津焼はますます盛んになりました。豊臣秀吉による朝鮮侵略は、陶器戦争ともいわれます。それほど陶器界に影響を与えました。福岡県の高取焼、上野焼などは、このとき渡来した陶工によって始められたものです。黒田藩の高取焼と同じ頃と思われる上畑焼がありました。登窯の跡があり、作品が古高取系であること、唐人墓が現存していることで証明されます。今、検証中です。十一月の町民文化祭で発表しますので、ご期待ください。



陶器



トチン、ハマ

「JR 海老津駅前」のくつろぎスペース

Book 座 Café

営業時間 10:00 ~ 20:00 オーダーストップ 19:30

約 50 種類の旬の雑誌と 1,000 冊以上のセレクト本をご用意。カフェではスイーツから軽食までおいしいメニューを取り揃えています。また、お子様と一緒にくつろげるキッズスペースも完備。待ち合わせやランチタイムにぜひご利用ください。



情報プラザ 人の駅 (09) 問い合わせ

様に内浦にたどり着き、ある家に一夜泊めてほしいとお願いをしました。この僧は、重い皮膚病を信仰の力で治そうと全国を旅している途中で。部屋に通され、疲れをいやそうとしましたが急に容態が悪くなりました。このままでは泊めてくれた方に迷惑をかけてしまうと思い、書置きをして這うようにして浜山のほうに行きました。次の朝、家の人が部屋に行くとも誰もおらず書置きだけがありました。それには「新しいそば粉をもってお参りし、古いそば粉を持って帰り、患部に塗ると治ります。」と書かれていました。近くを探したところ、砂山に穴を掘り、自ら生き仏になっている僧の姿を見つけました。村人はこの僧に心を打たれ、丁寧に墓に入れてあげました。



善財坊を祀った (編集委員会 撮影)

内浦の長源寺山門の横に、首なしの地蔵が二体祀られています。昔、このお寺に仕えていたとてまかつこよい小僧と内浦の気立ての良い娘さんが、相愛の仲になりました。そのうち、小僧は娘さんをお嫁にもらうと娘さんの父親に頼みに行きました。すると父親が、「お前のような若造には娘はやれん。もつと修行しなさい。」と言いました。それなら

ひれんにたいじまふ 悲恋二体地蔵



長源寺の二体地蔵 (編集委員会 撮影 H29.6)

とすることで、小僧は京のほうへ医療の修行に行きました。月日がたち、一人前になった小僧は、娘さんに会いに内浦の里へ帰ってきました。久しぶりに娘さんを訪ねると、その日、娘さんの婚礼があるということでした。娘さんの人が集まってきました。周囲の人にわけを伝えると、みんな困った顔になりました。出てきた父親が「お前なんか知らん。帰れ」といい小僧を追い払ってしまいました。小僧は募る思いに堪えきれず、婚礼のある座敷にかけあがり「覚悟をいたせ」と娘さんを刺し、自らも命を絶ちました。そのあと、結ばれなかった二人を思い、地蔵様ができました。(後藤芳佳)

【岡垣町史】(二九八) / 岡垣町史編集委員会編 九五七九五八頁
【岡垣町伝承民話集】(二九五) / 岡垣町教育委員会編 二二二三四頁

【岡垣町史】(二九八) / 岡垣町史編集委員会編 九五七九五八頁
【岡垣町伝承民話集】(二九五) / 岡垣町教育委員会編 二二二三四頁

2017年度 地域連携事業 【岡垣町/九州共立大学】 『岡垣歴史新聞』 プロジェクト・メンバー

指導員	九州共立大学スポーツ学部	山田 明
学生	九州共立大学スポーツ学部4年	川宿田 和未
	九州共立大学スポーツ学部3年	須藤 雄太
	九州共立大学スポーツ学部3年	梅本 沙希
	九州共立大学スポーツ学部3年	手島 瞳
	九州共立大学スポーツ学部3年	久間 健太郎
	九州共立大学スポーツ学部3年	後藤 芳佳
	九州共立大学スポーツ学部3年	藤井 参太
	九州共立大学スポーツ学部2年	中西 寿明
協力	歴史愛好家 (遠賀町在住)	張 淑怡



編集後記



近年、地域活性化という言葉をよく耳にします。まじまじと聞きつづけていくうちに、どうすれば良いかという具体的な方法論になれば疑問です。岡垣の皆さんは如何お考えでしょうか。私見ですが、普段何気なく過ごしている地域には実は素晴らしいものがあるのを見れば、他の地域の人から見ればとても新鮮で価値のあるものが存在します。それが地域資源であり、活用することが地域活性化の基本となると思います。例えば、今回特集した湯川山は、歴史ある故郷の名山です。全国的に有名な摺墨に関する牧場伝説もありです。古代山城に関す

る説もあります。こういった歴史遺産をもっとわかりやすく地域外の人にも紹介し、訪れてみたい場所として環境整備するなど一案ではないかと思えます。地元の人にはあたりまえのことを地域外の声も聴いて再発見し、地域の人々が主体的に活用していく。そこに町の元気づくりのヒントがあるように思えます。九州共立大学の学生がつくる地域活性化新聞『岡垣歴史新聞』がその一助となれば幸いです。二〇一八年の第3号も期待していただきたいと思います。

最後になりますが、本歴史新聞の内容をご覧いただき、ご意見、ご指摘をいただきました岡垣歴史文化研究会の皆様にご感謝申し上げます。

(山田 明)

ました。私は湯川山でのフィールドワークに参加しました。たくさんの歴史遺跡を見て、色々な歴史伝説を聞き、改めて歴史と現在生きている人々の間の深い絆を感じました。岡垣町の方々のおかげで今回の歴史新聞の取材がうまく出来ました。私は、たくさんの方々から郷土の歴史の魅力を感じました。この「岡垣歴史新聞」がきっかけになって、岡垣町の人々が少しでも地元の歴史や自然に興味を持っていただけたらと思っています。私も今回改めて日本と関係がある中国の歴史を調べました。知らなかったこともあり、有意義な経験になりました。

